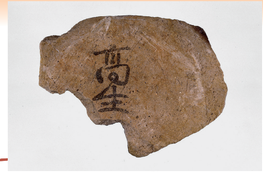
小角田前遺跡の住居跡検出状況（北から）
手前が国道17号バイパス
（上武道路）。



小角田下遺跡から出土した墨書土器（10世紀）
※『和名類聚抄』（平安時代中頃）にある新田郡６郷のうちの「淡甘」は、「たこう」とされ、現在も「高尾」の地名があり、高尾の地を「淡甘郷」にあてる説がある。

鼠塚遺跡から検出された前方後円墳（上が北）
主軸長44m、６世紀後半。水田の下から出現した古墳であり、墳丘は削平され平坦であった。『上毛古墳綜覧』（1938年）に記載されている「世良田村31号墳（鼠塚）」と思われる。

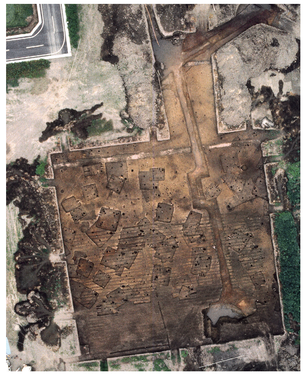
歌舞妓遺跡の住居跡検出状況（上が北）
・下は東武伊勢崎線世良田駅。
・右上は国道17号バイパス（上武道路）。

古瀬戸水滴（14世紀）
明確な中世以降の遺構は検出されていないが、若干の中世の遺物が出土している。

古墳時代の豪族居館跡

古墳時代の豪族居館跡は、南側の谷、北東側の旧早川、北西側の湿地という自然地形を利用し、台地を分断するように２本の溝を掘り、平面形は五角形状をしています。規模は、南辺約105m（谷）、東辺約60m（溝）、北東辺約110m（旧早川流路）、北西辺約90m（湿地）、西辺約70m（溝）です。

西辺の溝は、細長い台地中央部の最も狭い場所を、東西に分断するように掘られた、張り出し部を持つ直線部約70mの溝です。北側部分において台地縁辺部に沿うように、北東方向に鈍角に曲がり、だんだん浅くなり、約30m先の湿地際で壁の確認ができなくなります。規模は、幅約４m、深さ約１mであり、１回掘り直しが確認できました。居館跡の時期は、溝からの出土遺物と土層断面の状況から、５世紀後半と６世紀初頭の２時期が想定できます。



豪族居館跡の西辺の堀跡（上が北）

豪族居館跡の西辺の堀出土土器群（５世紀後半）

豪族居館跡の西辺の堀出土土器群（６世紀前半）

太田市教育委員会　文化財課
〒370-0495　群馬県太田市粕川町520
TEL.0276-20-7090　FAX.0276-52-6080
印刷　平成22年２月

水久保遺跡から検出した古墳時代の豪族居館跡の張り出し部(北西から)

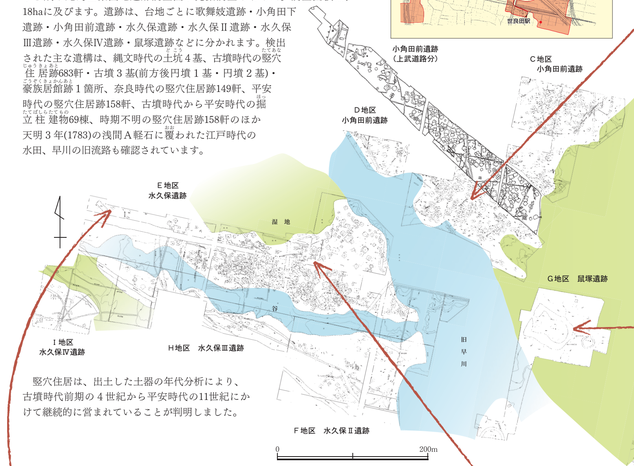
おじまこうぎょうだんちいせき

尾島工業団地遺跡

歌舞妓遺跡・小角田下遺跡・小角田前遺跡・水久保遺跡
水久保Ⅱ遺跡・水久保Ⅲ遺跡・水久保Ⅳ遺跡・鼠塚遺跡

尾島工業団地遺跡の概要

尾島工業団地遺跡は、太田市世良田町・小角田町に所在し、早川と石田川の間に位置する沖積地を挟んだ複数の台地上に立地します。1983年から1985年にかけて尾島工業団地の造成に伴い、尾島町教委と県企業局から成る尾島工業団地遺跡調査団が発掘調査しました。調査面積は、18haに及びます。遺跡は、台地ごとに歌舞妓遺跡・小角田下遺跡・小角田前遺跡・水久保遺跡・水久保Ⅱ遺跡・水久保Ⅲ遺跡・水久保Ⅳ遺跡・鼠塚遺跡などに分かれます。検出された主な遺構は、縄文時代の土坑４基、古墳時代の竪穴住居跡683軒・古墳３基(前方後円墳１基・円墳２基)・豪族居館跡１箇所、奈良時代の竪穴住居跡149軒、平安時代の竪穴住居跡158軒、古墳時代から平安時代の掘立柱建物69棟、時期不明の竪穴住居跡158軒のほか天明３年(1783)の浅間A軽石に覆われた江戸時代の水田、早川の旧流路も確認されています。



竪穴住居は、出土した土器の年代分析により、古墳時代前期の４世紀から平安時代の11世紀にかけて継続的に営まれていることが判明しました。

水久保遺跡から検出された巨大な掘立柱建物跡　(北西から)

水久保遺跡の９世紀後半の住居跡から出土した線刻土製紡錘車
「矢田乗人即□矢田公子□孚□」

土器の移り変わり

ここに並べた土器は、当時の人々の生活にかかせないものでした。土器には、その時代の特色が色濃く反映されています。土器の形は、現在の自動車が何年かごとにモデルチェンジをするように、時代によって少しずつ変化していきます。土器の形の変化を、年代順に並べることを編年といいます。これは遺跡を研究する上での基本となるものです。

ここでは、尾島工業団地遺跡から出土した土器を、50年ごとにまとめてみました。古墳時代前期の３世紀後半から平安時代後期の11世紀前半の16期に分類しました。土器の形の変わるところが分かりますか。特徴は、次のとおりです。

３世紀後半　弥生時代の特徴を持つ土器と古墳時代の土器である台付甕が出現し、両者が混在します。

４世紀前半　弥生系の土器が姿を消し、土師器のみとなり、甕は口縁部のＳ字状の台付甕が主流となります。

５世紀前半　台付甕が姿を消し、甕は胴の上部がふくらんだものが主流になります。

５世紀後半　須恵器が出現します。また、住居にはカマドが使用されるようになります。（以前は炉を使用。）

６世紀前半　坏は須恵器坏の蓋を模倣した坏が現れます。甕は胴が長くなります。

７世紀前半　模倣坏が少なくなり、口縁部が内湾する坏が出現します。甕の長胴化はピークをむかえます。

７世紀後半　甕は頸部のくびれがやや意識されるようになり、胴部の最大径が上部に移り、器高が低くなります。坏は、須恵器模倣坏から半球型の銅鋺模倣坏となります。

８世紀後半　甕の口縁部が「く」の字状になります。

９世紀前半　坏は平底となり、甕の口縁部は、「コ」の字状になります。

９世紀後半　灰釉陶器が持ち込まれるようになります。

10世紀前半　土師器の坏が減少し、軟弱な須恵器類が主流を占めます。煮炊き具は、鉄釜を真似た羽釜や土釜に変わっていきます。

【参　考】

土師器（はじき）－弥生時代の系統を引き、文様の簡素化が進んだ赤褐色の素焼きの土器。

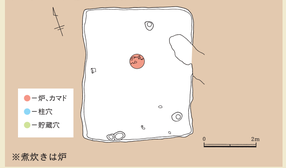
須恵器（すえき）－朝鮮半島から渡来した技術で焼かれた青灰色の土器。ロクロ整形、登り窯で焼成。

灰釉陶器（かいゆうとうき）－奈良時代後半から平安時代にかけて猿投窯(愛知県)を中心として東海地方全域にわたって焼かれた、植物灰を原料とした釉をかけて高火度で焼成した陶器。

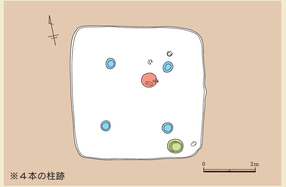
古墳時代　飛鳥時代

250年　3世紀後半　300年　4世紀前半　350年　4世紀後半　400年　5世紀前半　450年　5世紀後半　500年　6世紀前半　550年　6世紀後半　600年　7世紀前半　650年

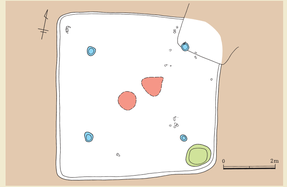
住居跡の移り変わり

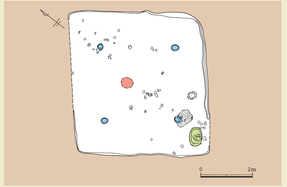


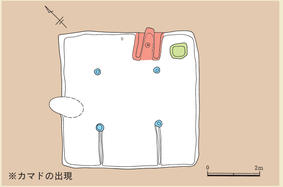
※煮炊きは炉



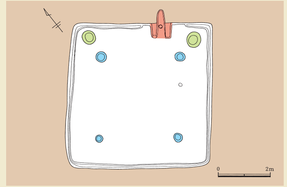
※４本の柱跡

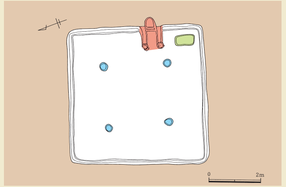


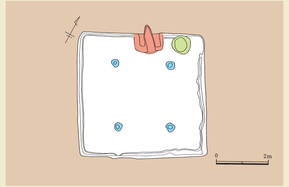




※カマドの出現

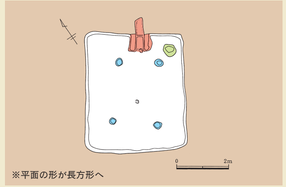




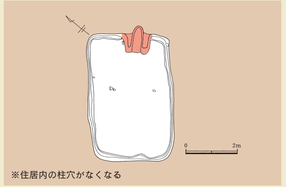


飛鳥時代　奈良時代　平安時代

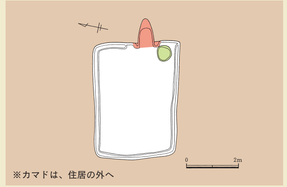
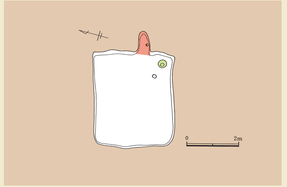
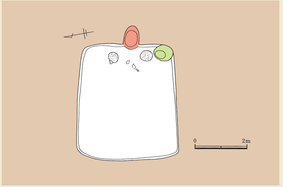
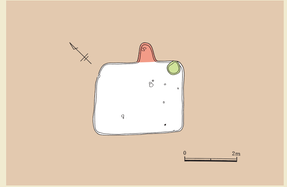
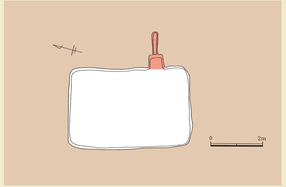
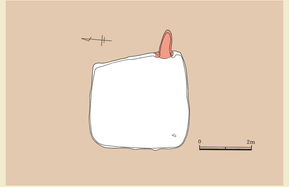
650年　7世紀後半　700年　8世紀前半　750年　8世紀後半　800年　9世紀前半　850年　9世紀後半　900年　10世紀前半　950年　10世紀後半　1000年　11世紀前半　1050年



※平面の形が長方形へ



※住居内の柱穴がなくなる



※カマドは、住居の外へ